

**1 4 環境倫理と宗教**

1. 環境倫理の諸問題 cf. 生命倫理（科学技術がもたらした新しい自由をその倫理性に留意しつつ、いかに実現するか）

自然の生存権 / 世代間倫理 / 地球全体主義

2. 聖書は人間中心主義か？

< 創世記 1 >

- 27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

「地の支配」とは？

- ・人間の固有の使命
- ・エデンの園の管理者・園丁
- ・「善悪の知識の木の実」を食べたことがもたらした結果としての地の搾取・破壊
- ・自然との関係をめぐる近代以前と以後における質的差異
- ・支配の王権イメージ：専制君主とイスラエルの王の理想（賢明な調停者）

3. 近代という歴史的状況・文明形態に固有の問題性

欲望の肥大化、暴走

4. 西洋がだめなら東洋、近代がだけなら近代以前、これで問題は解決するか？

近代とは別の選択肢？

5. 自然との共生のための前提

欲望のコントロール（欲望の無制限の肯定でも、欲望の完全否定でもなく）

正義と対話の精神

共に生きる世界のヴィジョンの共有

6. 共生のヴィジョンとしての黙示的終末論

現実を別の仕方で見える能力 批判的知恵

< サムエル記上 >

- 8:4 イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、5 彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」6 裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った。

- 12:12 ところが、アンモン人の王ハナシュが攻めて来たのを見ると、あなたたちの神、主

があなたたちの王であるにもかかわらず、『いや、王が我々の上に君臨すべきだ』とわたしに要求した。

<イザヤ11>

6 狼は小羊と共に宿り / 豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち / 小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ / その子らは共に伏し / 獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ / 幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては / 何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように / 大地は主を知る知識で満たされる。

<ブックガイド>

1. 北川浩一郎 『地球環境を守るために』(丸善ライブラリー)
2. 鬼頭秀一 『自然保護を問わないおす』(ちくま新書)
3. 加藤尚武編 『環境と倫理』(有斐閣アルマ)
4. 加藤尚武 『現代を読み解く倫理学』(丸善ライブラリー)
5. 栗林輝夫編 『現代キリスト教倫理4 世界に生きる』(日本基督教団出版局)
6. 芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』  
(世界思想社)

7. 並木浩一 『旧約聖書における文化と人間』(教文館)

「専制君主国家となりえなかったイスラエルでは、王といえども首位の貴族であった。」(並木[1999]、102頁)

「大地に直属する被造物に対して、人間はそうでない者として優位を与えられている。しかしその優位の内実は、同輩中の第一人者として神から統治を委任されるという、イスラエ尔的な王の位置と任務から理解される必要がある。王は神ではなく、神の委任によってのみ地上を治めて、その秩序の維持に責任を負う。……人間は動物の創造者ではなく、専制君主的な絶対的な支配権を持たない。むしろ人間は、聖書全体から見れば、動物たちとの友人関係に置かれている。」(ibid.,198頁)